



「どうだ。この陽射しは」

父は光に尋ねた。

「ええ。でも、僕は、やはり、初夏の陽射しよりは、真夏のまぶし過ぎるぐらいの陽射しの方が、美味しく感じられます」

光と父は二階のベランダで、長椅子に横たわっていた。そして、日光の味を確かめるように、一方は薄緑の、また一方は濃い緑の、自分たちの皮膚を撫でた。

「そうか。お前は、まだ若いからだろう。私ぐらいの年齢になると、真夏の光は焦げ臭くて、とても食べられたものではないよ。春先から初夏の光も、紫外線が強すぎて、皮膚が傷ついてしまう。秋の、部屋の中に太陽の尾のように長く差し込んでくる光が、甘すぎるわけでもなく、辛すぎるわけでもなく、ちょうど口当たり、いや、皮膚当たりがよくていいぐらいだ」

父は手のひらを太陽にかざした。太陽の光の下では、濃い緑色の皮膚は、年齢相応にかさついているように見えた。父の言葉で、正人は思い出したかのように

「そう言えば、おばあちゃんは、冬の小春日和の日差しが一番、美味しいって言っていましたよ」

「そうだな。年齢とともに、日光の味も変わってくるんだよ」

「でも、おじいちゃんは日光に当たり過ぎて、早く、亡くなったんでしょう」

光が生まれた時には、もう、既に、祖父は死んでいたため、遺影でしか顔は知らない。体中に皮膚がんが発生して、一年もたたないうちに亡くなったそうだ。

症状の初期の頃は歩くことができたものの、病気が進行するにつれて、次第に歩行困難となり、松葉杖を使う状況から、車いすを手放せない生活となり、最終的にはベッドで寝たきりとなり、亡くなったそうだ。それは、まだ、父が光と同様に、若い頃の事だった。

「ああ。私たちは、日光がないとエネルギーや栄養素を得ることができない。だから、こうして、一日のうちに、朝、昼、夕方と太陽の光に当たっているんだ。日光に当たりさせれば、ヒト

は生きていけるん。だが、その日光に長期間当たり続けることで、体に変異が現れることもある。日光は功罪を併せ持っているんだ。もちろん、日光だけじゃない。この地球上の全ての事は、良い面と悪い面の両方を兼ね備えているものなのだ。ただし、良い面、悪い面というのは、ヒトの都合、個人の都合によって変わるものだが」

「あなた。もうそろそろ、時間ですよ」

光たちの隣で、同じようにソファーに横たわって話を聞いていた母が、時計を見ながら、立ち上がった。

「長時間、日光に当たり過ぎると、体に毒ですから。それに、もう、お腹も一杯でしょう」

「そうか。もう、そんな時間か。光はどうする？」

「僕は、まだ、少しもの足りないので、後、五分ぐらい日光を浴びます」

「お前は、まだ、若いからな。でも、腹八分、いや、日光八分にしとけよ。じゃあ、母さん。私たちは、そろそろ部屋の中に入ろうか」

光が周囲の住宅を見渡すと、父や母と同じように、多くの人たちがベランダや庭から、そそくさと家の中に入ろうとしていた。その人たちは、父や母と同じくらいの年齢に見えた。光は、一旦、起き上がった背中を、再びソファーに押し倒した。

光はある計画を練っていた。その計画を実行するために、今、貯金をしていた。ある程度、お金が溜まったら、父や母と一緒に、海外旅行に行きたいと思っていたのだ。ヨーロッパなどの北半球や、アフリカやアジア、中南米などの赤道の近く、また、南米やオーストラリアなど、南半球の地などで、それぞれの地域の日光を浴びてみたかった。その地域の日光の味を確かめたかった。長椅子に横たわり、うつらうつらしながら、夢の中で世界を旅していた。その世界旅行が突然終了した。

「リリリン」

「五分たちましたよ」

時計の目覚ましのベルの音と母の呼び声で、光は現実のベランダに戻った。

工場や発電所、車などからとめどなく排出される二酸化炭素。発展する未来のためと称した森

林の伐採や、鉱山の開発などによる未来破壊。長寿という名の高齢化に伴う医療費や介護費の増大とそれを支え続けてきた現役世代の人々の疲労。適正な処理という名のもとで、廃水を薄めただけで海や川に垂れ流したり、廃棄物を山奥に埋めたりする処分方法。

そのため、海や山など汚染され続けて、漁獲量の減少と畜産や農業生産物の収穫減による食糧不足。また、一部の地域での人口激減と多くの地域での人口爆発による、アンバランスな人口分布。それが生産人口の減少と消費人口の増大につながり、食糧不足により一層拍車をかける。

地球温暖化により、建物内は温暖化に反比例するように冷房化が進む一方、冷房のための冷媒機から発せられる熱により、都市のヒートアップ現象がよりヒートアップする。また、強くなる紫外線による皮膚がんなどの病気の多発と死亡者の増加。

あらゆる面で、ヒトの世界は過度期、まさに転換期を迎えていた。このままではヒトもその他の生物も、地球さえも滅んでしまいそうだった。ヒトの世界を発展させ続けた意志に歯止めが効かなくなり、まるで、最初は小さな雪の結晶が、山を転がり続けるうちに、氷山になったかのようだった。その氷山の剣の先が、皮肉にも、今、ヒトの心臓を、地球の心臓を貫こうとしているのだ。

こうした中、ヒトの中にも、現状を打開しよう、未来をこの手で掴もうと英知を結集しようとする者たちがいた。その者たちは、研究を積み重ねて、ある重大で、重要な成果を得た。ヒトが太陽の光を浴びることで、エネルギーを、栄養分を自分の体内に得る薬を発明したのだった。そう、動物でありながら、植物のように光合成ができるようになったのだ。ヒトにとって新たな進化であった。新たな意志の方向性であった。

その新薬が完成すると、世界政府は、未来のヒトと地球ために称して、人々に強制的に薬を飲ませようとした。当然、薬を拒否する人々も現れたが、そうした進化に逆行するような人たちは、警察権力によって逮捕され、収容所に囲い込まれた。

収容所では、水や食べ物の中にその薬を混入して、朝食や昼食、夕食として提供した。その食事の中に、薬が混入されていることは分かっていたが、それ以外に、食べものや飲み物は与えてくれないため、背に腹は代えられず、多くの人々がその食事をやむなく摂取した。そして、めでたく、全てのヒトたちは、光合成ができる体に進化した。

光合成をするのはヒトではない、植物だ、それは神の教えに反する行為だ、と確固たる信念の下、薬が混入された食事を食べない、水を飲まない人たちは存在した。そうした人たちは、当然の帰結として、餓死した。世界政府は、あえて、そうした人たちを見て見ぬふりをして、好きなように行動させた。これらのヒトたちは、進化についていけない遅れたヒトたちだと判断したのだ

った。

こうして、ヒトは、新薬のおかげで、皮膚から光合成をすることができ、口から食事を摂取する必要はなくなった。このため、牛や豚、鶏などの家畜を飼育する必要も、マグロやサンマなど魚類の漁をする必要も、米や野菜などを栽培する必要もなくなり、食糧工場は全て閉鎖され、それに伴い、飲食店はなくなり、残飯も排出されなくなった。

また、人々は、太陽の光からエネルギーを摂取するため、日の出とともに活動し、日没とともに、休息した。夜になると、ビルや家の照明、街の街灯等は、全て消灯され、真っ暗となった。おかげで、エネルギーの消費量は減少し、それに伴い、石油やガスなどの地下資源の消費も大幅に減少した。この結果、二酸化炭素の排出量は激減し、地球温暖化の流れは抑制できた。まさに、究極のエコ活動であり、これまでのあらゆる課題が好転した。

なお、葉緑素の影響で、ヒトの皮膚は、白色人種も、黒色人種も、黄色人種も、全て同じ緑色の同一人種に進化した。そのため、肌の色が異なることでの人種差別はなくなった。まさに、いいことづくめのように思われた。

ヒトは、生まれて間もない頃は、皮膚は新芽のように若葉色で、成長とともに、緑色が濃くなっていき、老年になると、葉が枯れたように茶色に変化した。そうすると、エネルギーや栄養素を生み出すことができなくなり、やがて、最後の時を迎えた。

皮膚が茶色になって死ぬのは、この葉緑素を生み出す薬のせいだと批判する人たちが現れた。しかし、緑色人種になる前のヒトも、老化とともに最後を迎えたのだから、緑色人種になったことが原因ではない、と世界政府は断言した。

ただし、あまりにも強い光を長時間浴び続けると、皮膚の一部が老化と同じように茶色く変化し、木の葉がボロボロと崩れるように、体全身が壊れていく病気が発生した。だけど、老化と同様に、それは、緑色人種になる前のヒトも、ガンで亡くなる人はいたことから、同じ現象だ、と世界政府は説明し、その対策のための研究は続けられ、ヒトの意志は更なる進化を求めた。